

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第8号

《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての一考察
新屋敷 久美子

南部九州における中世瓦質土器の蛍光X線分析
黒木 梨絵

植物質資料からみた南九州
—天神段遺跡を中心に—
深川 祐子

全点ドット調査の有効性と問題点
—1970年代から1990年代の調査を中心に—
立神 倫史

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について
長野 眞一

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡
中村 耕治

郷土教育と考古学
—相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと—
吉元 輝幸

《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き
上床 眞

平成26年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2015.10

『縄文の森から』 第8号 目次

《研究ノート》

古墳時代肝属平野における地下式横穴墓出土鉄器についての考察

新屋敷 久美子 1

南部九州における中世瓦質土器の蛍光 X 線分析

黒木 梨絵 7

植物質資料からみた南部九州

— 天神段遺跡を中心に —

深川 祐子 19

全点ドット調査の有効性と問題点

— 1970年代から1990年代の調査を中心に —

立神 倫史 33

宮ノ上遺跡の縄文時代後期前半の土器群について

長野 眞一 47

大隅地域における古墳に関わる祭祀遺跡

中村 耕治 53

郷土教育と考古学

— 相田日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと —

吉元 輝幸 65

《資料紹介》

南部九州における古代のカマドに関する覚え書き

上床 真 77

平成26年度年報 85

郷土教育と考古学

—相川日出雄の埋蔵文化財を活用した教育実践から学ぶこと—

吉元 輝幸

Education for local patriotism and archeology

Yosimoto Teruyuki

要旨

今後の学校教育において、充実させていくことが重要であると改正教育基本法や本県の教育振興基本計画で指摘されている教育内容の一つに郷土教育がある。その郷土教育に利用できる教材の一つとして、土器片や石器等の埋蔵文化財がある。それは身近で郷土の歴史を知る上での大きな手がかりとなることから、有効な教材になると考えられる。

本稿では戦後、子どもの論理的思考力の育成を目指し、学校近くの遺跡とそこから出土する土器片等の埋蔵文化財を活用した郷土教育実践を行った相川日出雄の実践の分析を通じ、今後の郷土教育のあり方を考察する。相川の郷土教育実践は歴史的背景が異なる現代において学力形成、中でも論理的思考力の育成という点からも学ぶべき点が多い。

キーワード 郷土教育、相川日出雄、新しい地歴教育、生活綴り方、土器、論理的思考力

1 はじめに

平成 18 年に戦後 60 年以上にわたって教育のあり方を規定してきた教育基本法が改正された。改正教育基本法（以後、改正教基法と略記）には、今後の教育のあるべき姿、目指すべき理念が示されている。

その改正で新たに示された理念の一つに郷土教育の充実がある。その条文には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」（同法第二条 五）として、郷土教育の重要性が記された¹⁾。それは教育に対する今日の社会的な要請とも言える知・徳・体の調和がとれた発達及び、日本の伝統と文化を基盤として、我が国を誇りに思い、そして今後の国際社会を生きぬくことのできる能力を備えた日本人の育成を目指していくことが加味された内容と言えよう。

また、改正教育基本法に基づき、策定された教育振興基本計画を踏まえ、本県で定められた鹿児島県教育振興基本計画には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国の郷土を愛する態度を養い、これからの社会づくりに貢献できる人間」が基本目標とされ、今後 5 年間に取り組む施策における視点の一つに郷土の教育的な伝統や風土の活用を掲げ、郷土教育の推進を図ることが目標とされている²⁾。

郷土教育を推進していく上で重要なことは、子どもたちに身近な教材を使用した実践を行うことである。なぜなら、身近な教材は郷土をより身近なものとしてとらえさせることが期待でき、その良さに気付くことができれば、郷土を愛する態度が形成されると考えられるからである。郷土教育で活用できる教材はいろいろと考えられるが、その中の一つに文化財がある。文化財には様々な種類がある。それについて述べることは本稿の目的でないので割愛するが、いずれの文化財であっても、それらは郷土の先人たちが歩んだ歴史を知る手がかりとなる。

文化財の中でも遺跡から(子どもたちの通う校区内のものが理想)採取できる土器片や石器などの埋蔵文化財は身近で、それ自体が、その地域に生きた人々の生活の営みを示す遺産であり、地域の歩んできた歴史に関する様々な情報を引き出すことができるため、郷土教育の手軽でかつ有効な教材と言える。

一方、今日の学校に求められていることの一つに基礎学力の向上がある。背景には 2003 年に OECD の実施した国際学力調査(PISA)の結果、日本の子どもの数学的リテラシーや読解力などの基礎的な学力が前回調査と比較して低下したことが公表されたことにより、学力向上への取り組みを求める声と、その原因として「ゆとり教育」への批判が高まったことが挙げられる³⁾。

さらに、県教委が全国に先駆けて土曜授業の再開を市町村教育委員会に求めていくことを決定し⁴⁾、それを受けて鹿児島市をはじめとする県内各市町村がその実施に向けた準備・調整に着手するなど、学力向上に向けての取り組みは今後、さらに進んでいくであろう。

一方、郷土教育は学校の教育活動全体を通して行われているが、実際には地域学習を中心となって行う社会科がその中心的な役割を担うことが多い。

その目標は教育基本法や教育振興基本計画において「郷土を愛する態度を養う」という表記⁵⁾に見られるように態度形成が目標となっている。

態度形成は重要だが、学力向上が学校に求められている現在、態度形成に加え、「郷土教育を通じて形成可能な学力は何か」という観点からも、今後は郷土教育のあり方を再考していく必要はないだろうか。

そのような問題意識の下、本稿では戦後、文化財、特に埋蔵文化財を活用した郷土教育実践を行った相川日出雄(あいかわひでお 1917-1991)の実践の分析と考察を通して、郷土教育を通じた学力形成について考察することを目的とする。

2 相川日出雄と当時の学校及び考古学界の状況

まず、相川日出雄の生涯と、その前後の学校教育及び日本考古学の学問的な状況について概観しておきたい。

(1) 相川日出雄の生涯

相川日出雄は、戦後の初期社会科教育実践史を代表する実践家として著名である。その生涯の概略を述べる⁶⁾。

相川は1917年6月に東京府豊玉郡角筈(今の東京都新宿区)に生まれる。1939年に応召を受け、千葉陸軍病院に勤務するも、結核を患い勤務中に突然咯血したことが原因で1942年に除隊される。

その後、祖父母の郷里である千葉県印旛郡富里村に帰る。そこで、知人のすすめで教師の道を選び、1943年に千葉県安房郡根本村国民学校において教師生活をスタートさせる。その2年後の1945年、相川は敗戦を経験する。

その翌年、1946年に千葉県印旛郡富里小学校久能分校に転任する。相川の代表的な実践の記録である『新しい地歴教育』は、この分校における1952年度から1953年度の実践を中心にまとめられたものである。その中には学校近くの遺跡(現在、富里市教育委員会によって笠井田遺跡と指定されている)にある縦穴住居の跡とそこから表面採取できる土器片を教材として行った実践『かりのくらし』とその学習に入る前段階の実践記録が収められている。

その後、相川は1958年に山梨向井遺跡を発見する。それを機に小学校教師のかたわら千葉県各地の遺跡の発掘調査に参加するようになる。1961年に小学校教師を退職した相川は、考古学の研究を続ける傍ら、四街道市文化財審議会副会長などをつとめ、1991年に亡くなる。享年74歳であった。

(2) 学校教育の置かれていた状況

相川が実践を行っていた当時の学校教育及びその中の郷土教育のおかれていた状況について概観する。

郷土教育は1880年代に紹介された郷土教育が地理学習の準備段階とするペスタロッチ派の理論をもとにスタートした。その郷土教育は昭和初期には大いに盛り上がり、多彩な実践が行われた。特に1929年に起こった世界恐慌は、日本経済にも大きな打撃を与え、特に農村部の影響は大きかった。その打開策として政府は農村漁村経済更正運動を行った。その一環として、当時の文部省は農村を中心とする地方の教育の振興策を打ち出した。具体的には1930年に日本の師範学校を中心に郷土研究施設費を支給し、郷土研究室の設置や郷土研究資料の蒐集のための財政支援を行うとともに、郷土教育に関する講習会を積極的に開催した。

この時期、郷土教育は農村の復興と教育の地方分権化を目指して注目されたのである。各学校に設置された郷土研究室には地域の遺跡や、耕作の途中などで出土した土器や石器なども地域住民などから持ち込まれ、蒐集・展示されていた⁷⁾。

当時行われた教育実践の代表的なものを挙げると、大正自由教育の直感教育に郷土教育の性格を付与して誕生した東京女高等師範学校附属小の「社会科」、赤石女高等師範学校附属小の「郷土教育カリキュラム」などがある。

それらは、戦後の社会科教育の内容に匹敵する内容と方法を持った優れた実践であると評価されている。しかしながら、その郷土教育も戦況が進む1940年以降には、ほとんど見られなくなった。

1941年、国民学校令が施行された後の郷土教育は、国民学校第四学年の「郷土ノ観察」として位置づけられ、国民科歴史と国民科地理の準備教科として、愛国心育成のための教育内容の一部に位置づけられた。

戦時中も、引き続き郷土教育は愛国心育成のための手段として利用された。具体的には、郷土の偉人が掘り起こされて紹介されたり、郷土の自然や名産などがお国自慢的に紹介されたりと、「大東亜聖戦」を遂行するための精神的支柱としての役割を果たすようになる⁸⁾。このような時の権

力に奉仕するためとも言える郷土教育は、終戦とともに消え去ることとなった。

終戦を迎えると、米国による占領体制のもと、国家の体制のみに留まらず、教育制度についても大転換を求められることとなった。

連合国軍総司令部(GHQ)は、対日教育改革の基本政策を検討する目的で、合衆国教育施設団を派遣し、戦中の日本の教育制度などの調査を1946年3月に行った。その報告書をもとに学校教育制度自体も大きく改訂されることになった。

その中の郷土教育に関連することとして、合衆国教育施設団の派遣に先がけて、GHQは、1945年12月に「修身、日本歴史地理停止二関スル件」の指令を出し、国民学校における修身及び歴史の授業を禁じ、文部省に対しては、歴史教科書の改訂案の提出を求めた。

この命令を受けて文部省が作成した「暫定初等科国史」は日本書紀及び古事記の神話に関する説話がこれまでの教科書と同じように取り上げられていたことが理由で、GHQからは使用が許可されず、教科書として陽の目を見るに至らなかった。そのGHQの指示のもと、新たに歴史教科書の改訂が始まったのは1946年5月のことで、この時に編纂された国民学校初等科用の教科書が「くにのあゆみ 上・下」であった。その中の先史時代の項には、「食べ物を入れたり、にたきをするのには、土のはちや、かめが使はれました。これらの土器には、大てい、なは目のもようがついています。(中略)」とあり、他にも石器や貝塚などについての記述が見られる⁹⁾。



図1 「くにのあゆみ」 上 文部省

このように「くにのあゆみ」では、日本の国のおこりを神話ではなく、考古学が明らかにした事実をもとにして記されていることが特徴の一つと言える。

その「くにのあゆみ」も、社会科の新設とともに使用されなくなった。

1947年には学習の指針として、新たに学習指導要領が公布された。その中で戦時中の国史、地理、修身に変わる新たな教科として社会科の新設が盛り込まれた。それは、戦後の教育改革の中の一つの大きな出来事であった。その後、1952年に、指導要領は次の改定が行われるが、その間の1947年版及び1951年版学習指導要領社会科編で示された社会科を中心とし、広くは昭和20年代の成立期の社会科を指して、『初期社会科』と言われる¹⁰⁾。

初期社会科の代表的な実践として、文部省の実験学校となった桜田小学校の“桜田プラン”、あるいはすでに文部省に先立って実施していた“川甲プラン”などが挙げられる。それらの優れた実践が作られた一方、全国の教師は、指導要領の解説などを手がかりとして戸惑いながらも社会科について手探りで実践を行っていた¹¹⁾。その結果、全国各地で社会調査と児童調査に基づく「地域プラン」が作成され、教室では「ごっこ学習」が演じられた。

その初期社会科の学習方法は問題解決学習を主体とし、子どもの興味関心に基づいて学習が展開していった。その学習方法は、学力の低下をもたらすと懸念され、その学習方法は、子ども主導の経験的活動になぞらえて「はいまわる経験主義」と批判されることとなった¹²⁾。

一方、教育現場においては、社会科の研究が進む一方で、社会科とは距離を置き、地域のかかえる問題に着目し、その解決を目指した郷土教育の実践も一部の教師により展開された。それは、生活綴方を軸とし子どもたちの素直な感想や疑問などを綴り方にまとめ、フィールド・ワークや討論などを通して社会認識を深めていくところに一つの特徴があった¹³⁾。その代表的な実践として無着成恭の『山びこ学校』や本稿でとりあげる相川日出雄の『新しい地歴教育』が挙げられる。

上述のように、相川は、戦中・戦後の日本の混乱期において、学校教育を担った教師であった。

(3) 考古学の学問的状況

一方、当時の考古学の学問的状況に目を向けてみたい。

日本考古学は1877年のエドワード・モースによる大森貝塚の発掘調査及びその調査報告書の刊行を契機に本格的な学問としてスタートした。しかし、第二次世界大戦によってその歩みは停滞を余儀なくされる。戦況の悪化に伴い、若い研究者は戦場に送られ、定期刊行物は「考古学雑誌」以外は休刊となった。

当時の非科学的な皇国史観が歴史観として確立され、それが国民を戦争に駆り立てるための手段として用いられた。そのような歴史観において、考古資料は歴史を考察する上で重要視されていなかったからである¹⁴⁾。

終戦を境に再び、考古学の研究が始められた。その日本考古学が目指したものは、戦時中に国民の間に浸透していた「非科学的」な皇国史観を克服することであった¹⁵⁾。

そのような問題意識に基づき、1947年からのべ4年間にわたって発掘調査が行われた静岡県登呂遺跡の発掘調査の成果や相沢忠洋による群馬県岩宿遺跡での旧石器時代の遺物の発見などのニュースはそれまでの神話を中心であった歴史観に改訂を迫る成果を挙げた。

また、敗戦を経験した人々の日本の歴史に対する関心は高く、上記の発掘調査の成果が知れ渡り、「考古学ブーム」と言われるほどの流行をもたらすほど、国民の間に考古学に対する期待と関心が高まった時期であった¹⁶⁾。

その期待と関心を象徴する出来事として、1953年に岡山県飯岡村で行われた月の輪古墳の発掘調査がある。これは地元の飯岡村文化財保護同好会が中心となり、「この発掘を通して神かがりの歴史ではなく正しい歴史を学習する」という目標を掲げ¹⁷⁾、和島誠一などの研究者の指導を仰ぎながら、中高生も含めた地域住民も参加して調査が行われた。

その背景には、皇国史観を克服し、歴史の真実を知りたいという国民的要求と、それを解決する手段として考古学の調査・研究成果に大きな期待が集まっていたことを如実に示していると言えよう。

終戦後の世の中は、混乱のまっただ中であったが、前述のように、人々の生活が少しずつ改善していく過程で、教育界そして考古学界は戦時体制から、新体制へと着実に移行していた時期であったと言える。

そのような時代背景の中で行われたのが、相川日出雄の「新しい地歴教育」の実践である。

3 「新しい地歴教育」の先行研究

相川の『新しい地歴教育』の実践についての研究はこれまで多くの先行研究があるが、それらは大きく二つに分けることができる。

一つが初期社会科における代表的な実践記録としてそれらを位置付け、当時の社会科教育及び生活綴り方教育の実践と、その理論の探求を目的として、実践記録及び学習過程等を分析した研究である。

もう一つが相川の教職歴や研究歴、そして実践が行われた学校の状況や当時の時代背景等などの推移に伴って変容していくライフヒストリーの中に実践を位置付け、その実践に込められた願いや意図などを分析的に読み解く、いわゆるライフヒストリー研究である。

前者の代表的なものに小原友行(小原 1977)と、田中史郎(田中 1980)のものが挙げられる。小原は、「科学と生活、理論と実践が統一されており、科学的な歴史認識を通して、歴

史的実践主体を育成することを可能にした」と相川の実践を評価している¹⁸⁾。

田中は子どもの主体的な「探求」に着目し、「郷土のフィールド・ワークや生活綴り方の方法は、いわゆる『問題解決学習』とは異なるものであり子どもの主体的な「探求」と教師による知識の「教授」を結びつけて、事実や事実の関係を理解させ、またとりわけ生活綴り方は、子どもがそれなりに歴史像を追求する方法として重要な役割を果たしている。」として、相川実践における子どもの「探求」の仕方について評価している¹⁹⁾。他にも前者に位置付けられる研究として、臼井嘉一(臼井 1982)や小島晃(小島 1983)などの研究がある。

一方、後者の代表的なものに、臼井克尚(臼井 2012・2013)の一連の研究がある。臼井は、相川の生育歴や時代背景等の情報を文献資料及び関係者への聞き取り調査などで蒐集し、それらを分析している。それらの研究を通して、これまでの相川の評価に加え、「農村青年教師」としての彼の経験に即して、郷土史中心の授業作りへの転換が図られたことや、当時の農村が抱えていた、貧困問題に相川が着目していたことを指摘する。その上で、郷土史の研究と実践を通して、貧困問題を中心とした郷土の抱える問題の解決を目指していたことを指摘している²⁰⁾。

以上が『新しい地歴教育』を分析した先行研究である。

前述のように、郷土教育の重要性が教育基本法等で指摘されたことにより、今後各学校において郷土教育の研究が進んでいくことが予想される。その際、『新しい地歴教育』の実践も一つの参考にされることになるだろう。

その時に、相川の実践に限らず、戦前戦後を通して盛んに行われた郷土教育の実践や、その研究の成果を、現代の学校での郷土教育に生かすことはできないだろうか。

郷土教育の実践や研究が盛んに行われていた戦前・戦後の時代と現代とでは、農業に携わる人口は減少し、目に見える形での貧困は一応解消するなど、様々な面において歴史的状況及び生活環境が大きく異なる。そのような状況において、当時の実践及び理論をそのまま適用できるかという点については検討が必要である。

その点については臼井嘉一(臼井 2010)も「戦後日本教育実践史において展開されていたさまざまな地域に根ざす教育・郷土教育、生活綴り方教育、生活教育の諸活動・諸実践とどう関わり、どのように継承され、そしてグローバル化の新たな段階でまさに新たに再構築されていくのかというテーマが生まれてくる」と指摘している²¹⁾が、その点についての考察はまだ十分に行われていないのが現状である。

4 単元「かりのくらし」の概要

本実践の記録は「新しい地歴教育」国土社、1954年及び、『日本考古学講座』第1巻-考古学研究法、河出書房、1955年の中に納められている。それは相川が1952年と1953年の一学期、4年生を対象に行った郷土教育実践である。まず、郷土教育を行う上での構想について、相川は次のように述べる²³⁾。

私はまず地域社会(郷土)に対して、郷土史とは大まかに、1 地図学習、2 原始、3 古代、4 中世、5 近代、とし、1,2,3を一学期、4を二学期、5を三学期というように大まかに目標をおいた。そしてはじめはかならず村の資料を使うように計画を立てた。

表1 社会科一学期の指導計画²²⁾

社会科単元	社会科授業	その他の指導
1.地図学習 単元「地図学習」	授業「地図学習」 授業「実測」 ・地図を見て話し合い 授業「房総半島」 授業「日本」	・綴方指導 →年間継続して指導 ・版画指導 →年間継続して指導
2.かりのくらし(原始) 単元「かりのくらし」	・きくのや台地へフィールドワークに行った後、話し合い。 授業「土地・地層・地質」 授業「土器」 授業「テーマによる話し合い」	
3.農業のはじまり(古代) 単元「農業のはじまり」	授業「石包丁の変化」 授業「太陽」 授業「石棺とたてあなの家」	

この計画に基づき、相川は最初に綴り方の指導を行っている。その中で目指したものは「概念くだけ」とよばれる、子どもの技術的な能力や具体的な事物を見る目を高め、子どもの考え方を深める²⁴⁾ことであるとして、年間を通じて綴り方の指導に取り組む。

相川が綴り方の指導を取り入れた理由としては次の点が挙げられる。

一つ目が1950年に発刊された無着成添の「山びこ学校」の影響である。当時行われていた生活綴方教育とは、子どもに自己の生活をありのままに文章表現することを促し、文章表現指導とあわせて、子ども自らの生活の見方、考え方、感じ方、行動の仕方を教え、生き方の探求を促す指導を行うことである。その代表的な実践に位置付けられる「山びこ学校」の実践は、全国の教師に大きな影響を与えたのと同時に目標となった。「日本作文の会」に入り、生活綴り方の指導を研究していた相川も、その影響を受けていたと考えられる²⁵⁾。

二つ目の理由として、相川が所属していた武蔵野児童文化研究会において指導的立場にあった歴史学者の高橋禎一の影響がある。高橋禎一は生活綴方指導について「日常、具体的にもものを見る見方、考え方や感じ方を養っていくこの方法(注、綴り方指導のこと)が歴史教育において歴史的なものを見方を養う基盤になるということ。」と述べている²⁶⁾。

相川の指導により、綴り方に子どもが自ら感じたことや考えたことを素直に「あったことをよく思い出してそのとおりかく」ことができるようになった²⁷⁾。

この能力は、後の埋蔵文化財を活用した実践でも大きく発揮されることになる。

次に取り組んだのは地図学習である。その理由について、「歴史(郷土史)も」の授業をやるさいにはかならず地図が必要になってくる。たとえ四年でも地図の学習が、郷土史を学ぶ前にどうしてもなされなければならない仕事だった²⁸⁾とした上で、基本的指導方針について、相川は次のように述べる²⁹⁾。

- 1 実地で定める方向や測定する距離を紙の上に書いたり、みたりすること。
- 2 小さな地図を横と上から現わした図に同じ地面の地形図(縮尺五万分の一以下の地図)を対照させてみる。
- 3 村の地形図を実際と比較対照させる。
- 4 そうすることによって近い目で見たものから、単に絵はがきや幻灯や、地理的説明や図を利用することによって、遠い地方の理解が子どもにとって容易となってくるようにする。

この指導方針に基づき、綴り方の指導と平行して地図の読み方の指導を行っている。相川は校区の1号地図(5000分の1)から2号地図(10000分の1)、そして3号地図(25000分の1)と順番に縮尺の大きい地図から子どもたちに与えて読み方の指導をしている。

その中で縮尺が小さくなると、掲載される範囲が広くなることや、それに伴い田んぼや学校などは大きくなると地図には載らなくなることを学習している³⁰⁾。

地図の見方の指導に加えて、実際にその土地に出て距離や地形などを確かめさせ、理解が確実なものになるようにしている。具体的には、学校から「貝がらばつけ(貝の露出しているがけのこと)」までの距離を実際に歩いて巻き尺を用いて測定させ、その距離を地図の上で測った距離と比較させるなどの指導を行っている³¹⁾。

地図を活用する能力は、現行の小学校社会科指導要領においても学習を進める上で必要とされている基礎的な学力に位置づけられる³²⁾。

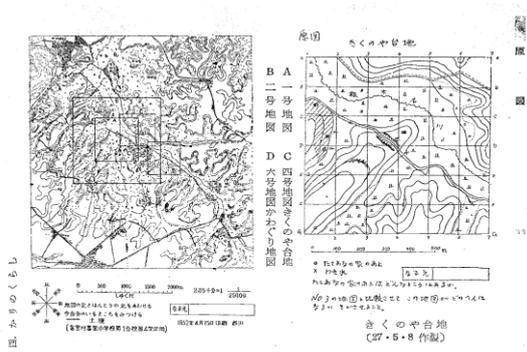


図2 指導に使用された地図

しかし、多忙な学校現場の現状では、地図学習だけに多くの時間を割くことができず、結果として八方位や地図記号などの地図に用いられる記号の意味や基本的な決まり等の説明程度に終わってしまいがちである。

相川は、郷土史の学習を進めていく上で、地図学習を重要なものと位置付け、体験を通してその意味を理解させることに加えて、学習の時期を最初に位置づけている。

綴り方の指導及び地図の見方の指導を経て、埋蔵文化財を活用した単元である「かりのくらし」の学習に入る。指導にあたり相川は次の四つの目標を設定した³³⁾。

- | | |
|---|---|
| 1 | 村には道路工事で切通しにしたところが、ちょうど、たて穴の住居跡にあたり、その断面の見えているところがあるので、まずそこへ最初いってみることにした。 |
| 2 | 地図は次項のものを相似型で作った。(図2のこと) |
| 3 | 土器も落ちているし、たて穴の断面には炉のあとと木炭がでていますが、これらの遺物に対して <u>好古学</u> にならぬよう注意する。 |
| 4 | 住居跡や遺物で台地の突端に祖先が住んだのはなぜかを中心にする。 |
- ※ 傍線は筆者による

その目標をどのように実践に反映させていったのかを実践の流れに沿って見てみることにする。

最初に相川は、目標1にある通り、子どもたちをさきのや台地の切り通しのところに連れて行き、縦穴住居跡を観察させている。

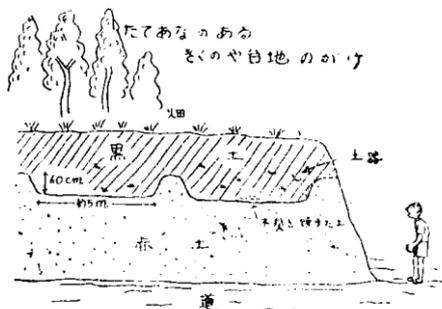


図3 縦穴住居跡の見えるさきのや大地のがけ

この図は『新しい地歴教育』に掲載されているものであるが、切り通しによって二つの縦穴住居跡が分断され、その断面が路頭に見えていることが図から分かる。相川は、ここで子どもたちに地層の解説をしている³⁴⁾。

その後、「なんでもいいからわからんことをかいてごらん」と指示した。それに対して、子どもたちは次のような疑問を出した³⁵⁾。

表2 子どもたちの意見

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・昔はどうして着物が無いのだろう。 ・昔使った土器がなぜ残っているのだろう。 ・昔の家で電気がなくてよるねるのにどうしたんだろうか。 ・土器は水とけかないからふしぎ。 ・土器に砂がまじっている。 ・どうしてねん土がかたまると土器になるのか。 ・どうしてつぼにもようをつけるのか。 ・どうして昔の家はあなをほったか。 ・ゆかもないのにどうしてねたか。 ・なぜねん土で土器をつくったか。 ・昔の人が住んでいたところになぜ土器が落ちているのか。 ・どうして昔からくらしがちがってくるか勉強したい。 ・土器をどうして一番はじめ考えたのか。 ・昔はなにを今のごはんにしていたか。 ・火山がばくはつしてどうしてとおいところまで灰がとんできたか。 ・なわのついた土器をどうしてじょう文というのか。 ・口のせまいつぼはどうして中を丸くしたのか。 ・火山灰はどうしてロームになったか。 |
|--|

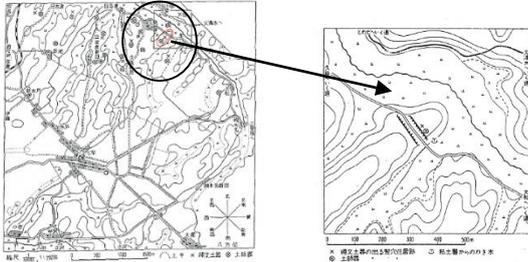
これらを見てみると、子どもたちが実に素直に感じたことや考えたことを出していることが分かる。それができたのは、綴り方指導において「あったことをよく思い出してそのとおりにかく」ことを指導されていて、いことが考えられる。加えて子どもたちの疑問を見てみると「どうして」という表記が目につくが、これは相川の指示でもあり、加えて指導において重視していたことでもある。

相川自身、考古学の研究成果を教育の場面でどのように取り入れているかについて次のように述べる³⁶⁾。

文書形式でいうなら、「～だから～である。」とか「それだから～」というような論理的思考は考古学という科学で、遺跡や遺物からものを見極めていくのにもっとも根本的なものと考えている。ではそれを教育の場に適用した場合はどうなるのであろうか。考古学で当時の社会発展を学ばせると共に、子どもの論理的思考力をそれは極めて単純な推理、判断ではあるが養っていくことを私は重視したい。

つまり、考古学を教育の場に適用することによって子どもにも論理的思考力を養うことを目的としていたことがここから分かる。

目標2では、授業で使用する地図について述べているが、話し合いの前に三号地図(図2右)に縄文式土器を拾った地点を記入させ、それを四号地図と比較させている。



※右が図3のきくのや台地

図4 話し合いに用いた図

図4を見てみると、台地の縁辺部で多く土器片を拾っていることが分かる。

目標3は、土器片や炭化物など、竪穴住居の周辺で表面採取された埋蔵文化財の扱いについて述べた部分だが、その中の「好古学にならぬよう注意する」とはどういうことであろうか。

遺跡内にある畑などに落ちている土器片は、土器の名前や時期などを教えると、大いに興味をかき立てられるものであるが、それは相川の担任していた子どもであっても同じであろうと考えられる。

実際に相川が勤務していた富里村の畑には、土器片だけでなく、石斧や石鏃が落ちていて、子どもたちはそれを見つけて、競って相川に報告していたという³⁷⁾。

相川はそれに対して「特に珍しいものをもって来た子どもには、ノートや鉛筆をくれたものです。私もつとめて村の畑や山を家庭訪問の度毎にあるくようにしました。」と分布調査に取り組んでいた³⁸⁾。その上で子どもや父兄を通じて考古学的な遺物が村の歴史を調べるのに大切な宝であるとして、次のような活動を通して、考古学的遺物の重要性について、村民への啓発を行っていた。

相川の勤務していた学校では、昭和25年(1950年)に村の教育費で幻灯機を購入した。相川は「私たちの村の歴史」という自作のスライドを制作し、校区内で映写して回っていた。その結果、保護者以外の人々も含めて幻灯後援会ができる程好評であったという³⁹⁾。そのスライドを制作するにあたり、相川は次の目標を立てている⁴⁰⁾。

村には第四期洪積期成田層の貝化石の出る場所が多く、また畑、山に原始時代の土器・石器の散布地が相当数存在し、多くの出土品があるが、その価値が分からないため、多く

すてられかえり見られていない。以上の具体的現実からこの土地がいかにかに出来あがり、村の祖先が土地でどんな生活をしてきたかをはっきりさせなければならない。

このことから、スライドを制作していた時点、つまり「新しい地歴教育」の実践が行われる以前に、相川は遺物が郷土の歴史を解明する上で重要なものであるという認識を持っていたことが分かる。

このスライドは四年生の授業でも活用されるが、その時に相川は、郷土の理解をさらに進める上で、正確な知識を得るための副読本の必要性に気付く。そして「私たちの村」という副読本を作成するが、その中に相川は、次の文を掲載している⁴¹⁾。

この本は次の目的のために富里小学校社会科研究部で編集して作りました。第一に久能、日吉倉及びその付近の土地がいかにかにして成り立ったか、ということを知りから学習していくうちに理解させること。

第二にこの土地の先祖の人々があらゆる困難とたたかいつつながら発展向上してきた、ということを知りから土地の遺物などから学ばせること。(以下、省略)

この文からも、相川が郷土の先祖の歩んできた歴史を学ぶのにも遺物は重要であるという認識を持っていたことが分かる。授業以外にもそのような目標を掲げて、埋蔵文化財の重要性について啓発するための取り組みを行っていた相川は、「めずらしい・おもしろい」といった程度で埋蔵文化財に対する子どもの認識が留まるような指導にはならないという指導観を持っていたと言える。

目標4は指導の中心的課題と位置づけられている。それは、遺跡の立地条件に関することであるが、台地の縁辺部分に遺跡が多いということは、一般にはあまり知られていない知識である。しかし、考古学に携わる者にとってはある意味常識とも言える知識である。

なぜ、相川はこのテーマを中心的課題としたのか。その理由として、次三点の理由が考えられる。

一つ目の理由は、相川には考古学の調査及び郷土のフィールドワークによって得られた専門的知識があり、それを授業において活用しようとしていたからである。

当時の相川は、武蔵野児童研究会に所属しており、同じくその会に所属していた考古学者の和島誠一から指導を受けていたが、その影響が大きい。

相川は子どもを連れていく前に、和島誠一に縦穴住居跡を見てもらっている。

その際、和島から「たて穴住居跡と水とは必ず関係がある」そして、「台地ははじめは狩猟だけだったが、徳川期には広い部分が放牧場となり、現在は広大な畑となっている土地の生産力の発展を考えなければならぬ。しかしだからといってすべてを土地の生産力にもっていつてはいけぬ」

と、指導を受けた。その時に「なんというぼんくらだったろうと思った」と述べているように、その指導が相川に与えた影響は大きかったと考えられる⁴²⁾。

和島誠一の指導により相川が気付いたことは「いろいろな知識をつかんで、それを統一的に使うという意識が欠けていた」という点である⁴³⁾。

相川が気付いた「いろいろな知識を統一的に使う」とは、どういうことか。堅穴住居の立地条件については次のように述べている⁴⁴⁾。

なるほどよく考えてみると台地の突端部にたて穴住居をもうけるのは、石器などでは井戸は掘れないから、台地の中央部では水に困るし、「では、その水はどのようなところに湧くか?」となると地層の問題にぶつかるし、それはさらに発展して土地の生い立ちにまでいかなければならなかった。

相川の気付いた「いろいろな知識を統一的に使う」という場面を授業の中に組み込むために、その素材としてふさわしいと考えたのが遺跡の立地条件とその理由を考えさせることであった。

このことに気付いた相川は、理科の学習において井戸や川などの観察や地下水のおこりを理解させるために水を通す土とそうでない土があることを実験によって確かめさせている⁴⁵⁾。

そこで得られた知識は堅穴住居の立地条件についての理解を深めるために役立っている。

二つ目の理由として考えられるのが、相川が実践を行っていた当時の富里村の抱えていた課題があり、それを克服することができる子どもの育成を目指していたことが挙げられる。

相川が実践を行っていた富里村は落花生やさつまいもが作られており、水田のない農民は陸稲を栽培していた。しかし、それは非常に不安定なものであったという⁴⁶⁾。

それらの課題の原因を突き詰めていくとそれは「水」という問題に行き着く。相川の勤務校の校区の農村の現状は相川の教え子の次の綴り方からも分かる⁴⁷⁾。雨が降らない時の様子である。

雨	見沢悦子
雨がちっともふらない。 とうちゃんとおっかちゃんは 「さくもつがかれたり、おかぼがかれたりするから雨をふらしたい。」と 毎日いつている。 夕がたとうちゃんは畑へ行って、なっばに水をかける。 だいこんもかける。 じょうろへ水を入れて毎日かける。	

らっかせいの畑も、いも畑も、おかぼの畑もみんなあか土(註:関東ロームのこと)がぶかぶかになっている。

風がふくとバスがとおったあとのようにえらいほこりだ。

ふりかえって、堅穴住居に住んでいた人々が台地の縁辺部に住居を建てて住んだのは、台地の下を流れる川があればそこから、がけから水が湧く場合にはそこから生活に欠かせない水を得るためである。

堅穴住居を設営した時代と相川が目の前にしている郷土の農家の現実。この両者の課題は「水を得るために工夫・苦勞をしている」という点で共通している。

そのことは、相川は「やはり人間は苦しんでいるのだ」と述べている⁴⁸⁾ことから、相川も同じ認識を持っていたことが分かる。

さらに相川は、郷土教育を通して過去の人々が困難を克服して発展・向上してきたことを、遺物を通して学ばせようとしていた。つまり、堅穴住居に暮らしていた人々が水を得るために立地などを工夫して、その課題を克服していたことを学ばせようとしていたのである。

過去に郷土に生きた人々がそのような努力をしていたことに共感させることができれば、子どもたちにも「自分たちにもできる」という気持ちを持たせることができる。

三つ目の理由として、子どもたちにとって堅穴住居跡が身近なものであったからである。

しかし、身近で毎日子どもたちの目に触れるものであっても、その意味が分かれば、さらに興味が湧き、もっと調べてみたいと考えるだろう。

単元「かりのくらし」の指導にあたり授業の中で子どもに追求させるテーマを目標4に掲げた通り、①台地の上に住んだのはなぜか。②台地のつき出たところにすんだのはなぜか。という二つに絞り、土器が採取された場所を地図で確かめながら、子どもたちと討論を行った。

表5は実際の授業の展開である⁴⁹⁾。

表5 授業「土器」の展開

【相川】 どんなところに土器が落ちている?
【児童】・久能,日吉倉に多い。 ・部落のそばに多い。 ・ちがうところにも落ちているよ。 ・台地の上にみんなある。
【相川】 台地のどんなところに?
【児童】・道のそば ・田んぼの枝の前にある。 ・台地のまん中の七栄の方は家がなかったと先生がいったと。 ・台地のとがったところに土器が落ちている。

【相川】 そうだ!その通りだよ。これはだいじなことだよ。そこに人が住んでいたんだね。じゃどうして台地のまん中,奥の方には住まなかったのだろうか。

【児童】 野原のまん中にはどうぶつがいない。

【相川】 うーんといたよ。

【児童】 ・あれえ。じゃどうしてだろうか。

・七栄の方は高いから,下の方はみられない。

【相川】 けしきのいいところに住むとは決まっていなね。

【児童】 かりのくらしのころはひゃくしょう知らないから台地のとがったところへ住んだんだ。

【相川】 まあーだまだ,ちがうよ。

【児童】 ・あれえ,どうしてだろうかなあ。

・台地の下だとおっかけておいつめられるから。

【相川】 なあーに。下のやぶへにげちまうよ。

【児童】 あれえ。うん,そうだ。はい,はい。水に困るから。

【相川】 そうだ!そのとおりなんだ。台地の先へ住んだのは水に困るからなんだ。かりのくらしのころはまだ鉄を知らないから石のどうぐだったね。それで五メートルも十メートルも井戸をほれないべ。だから台地の先のねん土層のわき水のあるところへ住んだんだよ。

【児童】 なあーんだ。そうかあ。

実際の授業の中で相川の出した発問を見ても「水に困るから」という答えに対しての直接的なヒントとなるような発問や説明は見当たらない。

つまり,子どもたちが,この授業を受ける前までにフィールドワークや地図学習など,それらを通して得られた知識をもとにして答えを導き出すことができていたと言える。つまり相川が目指した「いろいろな知識をつかんで,それを統一的に使う」という目標は,この実践に関しては,その目標を達成できていたと言える。

5 まとめと課題

(1) 研究の成果

埋蔵文化財を活用した郷土教育のあり方について,相川の行った「新しい地歴教育」の相川実践の分析及び考察を行った。その結果,次の点が明らかとなった。

まず,子どもたちの理解を深めるために,その場限りではなく,計画的に指導を行っている点である。具体的には当初に綴り方の指導,次いで地図の読み方と活用の仕方の指導,地質について理解をするために理科で実験を行い,そして埋蔵文化財を活用した授業へというように,子どもたちが自分たちの住む郷土について深い理解が得られるように必要な知識や技能を見通し,計画的に学習を進めている点が明らかとなった。

その結果,授業の中で子どもたちからさまざまな意見を引き出すことができていた。さらに,相川が授業の中心とした「住居跡や遺物で台地の突端に祖先が住んだのはなぜか」という問題に対しても「水に困るから」という認識に至っている。

次に明らかとなったのは,相川が考古学研究で得た専門的な知識を授業に生かしていることである。これは,相川が「土器」の授業の中で子どもたちに「じゃ,どうして台地のまん中,奥のほうには人が住まなかったのだろうか。」という問いを子どもたちに出し,そして「水に困るから」という答えを討論によって見事に引き出したが,その際の相川の説明は,考古学研究によって得られた専門的な知識を活用したものである。

ちなみに考古学はきわめて論理的な学問である。出土した遺物や遺構,そして出土した層や周辺地形等のさまざまな条件を手がかりにして当時の歴史を復元する学問である。それがゆえに,論理的に考えることを求められる。

このように,考古資料及びその立地条件等から『何が分かるか』ということを考える考古学の考え方は,それを授業に取り入れることにより,論理的思考力の育成にもつながるものである。

さて,現在子どもたちの学力向上が求められていることは前述の通りである。毎年実施される全国学力調査においても,結果が思わしくないのが,どの教科においてもB問題,つまり資料を活用してそこから何が分かるのかを答える問題である。ここで求められる力こそ,まさに相川が考える「いろいろな知識をつかんでそれを統一的に使う」ことができる力ではないだろうか。

ふりかえって相川の郷土教育実践を今日の教育実践にどう生かしていくかを,現在求められている「学力向上」という観点から考えると,論理的思考力の育成を目指した郷土教育を進めていくことが必要ではないか。その観点から考えると,相川の行った郷土教育実践は現在においても大いに参考になると思われる。

話はそれるが,東日本大震災をきっかけに,日頃からの災害への備えについての関心が高まっている。災害への備えの第一歩は,自分の地域ではどのような災害が起こりうるかをまず知ることである。そのためには,土地に刻まれた地域の歴史を知ることができる遺跡は格好の資料となりうる。遺跡から過去にその地でどのような災害が起こったかを示す痕跡が出てくることは,それほど珍しいことではない。もし,地域にそのような遺跡があったら,防災教育を推進する上でも,遺跡は活用が可能である。

(2) 今後の課題

相川は「土器」の実践の後、授業「石包丁」や「石棺とたてあなの家」などの実践に取り組むが、その中でも縦穴住居跡から出土した土師器片を活用したり校区にある古墳へのフィールドワークに行ったりするなど埋蔵文化財や古墳などの遺構を授業で活用したり、校区住民からもらった古文書を活用した授業などにも取り組んでいる⁵⁰⁾。

それらの実践を、今後の郷土教育の実践に活用していかれるかどうかについて、今後も研究を進めていきたい。

しかしながら埋蔵文化財を活用した実践を広めていくためには解決しなければならない課題が多い。例えば縄文時代や弥生時代の学習は小学 6 年生になったばかりの 4 月に行われる。この時期は教師も多忙であり遺物の借用や準備の時間確保が難しい。さらに、教育政策によって左右される場合もある。その例の一つ挙げる。日本考古学協会は 2006 年に「社会科教科書問題検討小委員会」を立ち上げた。その理由は 1998 年(平成 10 年)の学習指導要領の改訂に伴い、歴史教科書の記述が「弥生時代」から始まるものが一般的となっており、それ以前の「縄文・旧石器時代」についてはまったく触れられていない教科書が出てきたことである⁵¹⁾。埋蔵文化財を活用した授業が効果をあげるこの時代が削減されてしまったのである。

その原因は指導要領の改訂により教育内容の削減が実施され、それに伴い削減されたものである。加えて小学校の歴史学習においては、歴史に身を置いた人物を通して歴史を学ばせるねらいがあった。よって、旧石器時代や縄文時代では具体的な人物を取り上げようもないという事情があった⁵²⁾。

それに対して日本考古学協会は 2008 年に「学習指導要領の修正に関する要望書」を当時の文部科学省に提出し、「1 列島全域に普遍的に存在する考古学資料を十分に活用し、身近にある郷土の歴史を学ぶ姿勢を尊重すること。2 旧石器時代から始まる列島の歴史を明確に位置付け、世界的な視野から人類の営みを考える視点をはぐくむこと」の二点を要望した。現行の指導要領(平成 20 年 3 月告示)においては、「狩猟・採集や農耕の生活(以下省略)」から取り上げられるように改訂された。

日本に旧石器時代が存在したことは発掘調査の成果によって証明された厳然たる事実であるが、時の指導要領の改訂といった国の教育政策によって教科書にも取り上げられなくなることがありうることを示した事例である。

本来そのようなことがあってはならないはずだが、埋蔵文化財を活用した実践は、ともすると国の教育政策によって翻弄されてしまう危険があるものであることを認識すべきである。これまで述べてきたように、埋蔵文化財を活用した実践は子どもの論理的思考力を育成する上有効な

教材である。埋蔵文化財をただの“好古学”のための資料ではなく郷土の歴史を学ぶ上で重要であると位置付けた実践が広まることを願うものである。今後も学校教育において埋蔵文化財を活用した郷土教育のあり方を検討していきたい。

【引用・参考文献】

- (1) 2009,「教育小六法」教育基本法, p.88 学陽書房。
- (2) 鹿児島県教委,2014,「鹿児島県教育振興基本計画」, p.28.
- (3) 山本正身 2014,「日本教育史」慶應義塾大学出版会, p.412.
- (4) 鹿児島県教育委員会は 2014 年 12 月 3 日付けで各市町村教育委員会教育長宛に「小・中学校における土曜日の授業実施に係る留意事項等について」という通知文を出し、市町村教委に対し土曜授業を含めた教育課程全体の見直しは有意義であるとの見解を示した。
- (5) 鹿児島県教委,2014,「鹿児島県教育振興基本計画」, p.28.
- (6) 白井克尚「相川日出雄のライフヒストリー研究 -小学校社会科教師としての専門性育成に焦点を当てて-」『歴史教育史研究』第 10 号,歴史教育史研究会 2012 年,pp.25-47 をもとにまとめた。
- (7) 西川宏,1986 年「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学』第 7 巻-現代と考古学,岩波書店, p.178.
- (8) 桑原正雄「教師のための郷土教育」河出書房,1956 年,p.12.
- (9) 1946.「くにのあゆみ・上」 文部省. pp.2-5.
- (10) 小原友行,2000 年,「初期社会科」,「社会科重要用語 300 の基礎知識」森分孝治・片上宗二編,明治図書, p.58.
- (11) 馬居政幸,1987 年「社会科教育変遷過程の研究(2)-社会科論の構造-」静岡大学教育学部研究報告,教科教育学編,18. p.4.
- (12) 谷本美彦 2000 年,「はいまわる経験主義」,「社会科重要用語 300 の基礎知識」森分孝治・片上宗二編,明治図書, p.37.
- (13) 小原友行,1998 年,「初期社会科授業論の展開」,風間書房, p.459.
- (14) 西川宏,1986 年,「学校教育と考古学」『岩波講座 日本考古学』第 7 巻-現代と考古学,岩波書店, p.178.
- (15) 西川宏,前掲書,「学校教育と考古学」,p.186
- (16) 西川宏,前掲書,「学校教育と考古学」,p.186
- (17) 近藤義郎,1998 年,「月の輪古墳」『吉備考古ライブラリー ①』,吉備人出版 pp.28-29.
- (18) 小原友行,1977 年「小学校における歴史授業構成について-相川日出雄『新しい地歴教育』の場合」広島史学研究会『史学研究』第 137 号。
- (19) 田中史郎,1980 年「相川日出雄-『新しい地歴教育』における方法と内容-現代歴史教育理論研究-」岡山大学教育学部研究集録第 55 号。
- (20) 白井克尚,2013 年「相川日出雄による郷土史中心の小学校社会科授業づくり-『新しい地歴教育』実践の創造過程にお

ける農村青年教師としての経験と意味-」,「社会科研究」第 79 号,全国社会科教育学会,pp13-24。

(52) 2006 年 10 月 25 日付 中日新聞「消えた旧石器・縄文時代」に掲載の安野功教科調査官のコメント。

- (21) 白井嘉一,2010 年「戦後日本教育実践史の新段階と『場の教育』『シティズンシップ教育』」,戦後日本における教育実践の展開課程に関する総合的調査研究論文集,p152。
- (22) 相川日出雄「新しい地歴教育」国土社,1954 年を元に作成。
- (23) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.18。
- (24) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.15。
- (25) 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育の道」歴史評論 No.35 1952 年 p.48。で相川は「歴史教育の道は綴方教育への道につながるということです。」と述べるなど綴方教育の重要性を指摘している。
- (26) 高橋禎一,1984,「高橋禎一著作集 7 歴史教育と歴史意識」あゆみ出版, pp.208-209。
- (27) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.19。
- (28) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.18。
- (29) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.23。
- (30) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.17-34。
- (31) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.20。
- (32) 文部科学省「小学校学習指導要領」第 2 章 各教科 第 2 節 社会には,3 年から 5 年生までにわたって,目標に地図などの基礎的資料の効果的な活用が掲げられている。
- (33) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.80-82。
- (34) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.85。
- (35) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.90。
- (36) 相川日出雄,1955 年「考古学と郷土教育(実践例 I 小学校の部)」和島誠一編『日本考古学講座』第 1 巻,河出書房,p.253。
- (37) 相川日出雄「私の歩んだ歴史教育の道」歴史評論,No35.1952 年,p.39。
- (38) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.39。
- (39) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.40。
- (40) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.41。
- (41) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」p.43。
- (42) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.82。
- (43) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.83。
- (44) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.83。
- (45) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.84。
- (46) 相川日出雄,前掲書「歴史評論,No.35」 p.46。
- (47) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.92。
- (48) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 p.91。
- (49) 相川日出雄,前掲書『新しい地歴教育』 pp.93-95。
- (50) 相川日出雄,1962「古文書と歴史教育 実践例(小学校)」高橋禎一編『古文書入門』河出書房新社。
- (51) 社会科・歴史教科書等検討委員会,2008 年「社会科・歴史教科書を考える-小学校の教科書から消えた旧石器・縄文の記述」日本考古学 第 26 号,日本考古学協会,pp.181-199。

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第8号

発行年月 2015年10月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No.8 CONTENTS

《Study Note》

Ironware excavated from Underground Carridor-style Brial Chambers in the Kofun jar, Kimotsuki Plain
Shinyashiki Kumiko

X-ray fluorescence analysis of Medieval pottery in Southern Kyusyu, Japan
Kuroki Rie

Ancient South Kyusyu considered from vegetable matters with focus on Tenjindan site
Fukagawa Yuko

Validity and Problems of All Dot Excavation
Tategami Michifumi

Miyanoue site' s pottery group in the first half of the end of the Jomon
Nagano Shinichi

The Ritural site to Be Affected Tumulus In Osumi Aria
Nakamura Kouji

Education for local patriotism and archeology
Yoshimoto Teruyuki

《Materials of Archaeological Research》

Introducing Chinaware from Southeast Asia excavated in Kamizuru site by the Manose river lower stream
Uwatoko Makoto

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 26th year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
October 2015

研究紀要・年報

縄文の森から

第8号

二〇一五年
鹿児島県立埋蔵文化財センター